

〈翻刻〉奈良県立図書館蔵『帝鑑図説』（寛永四年刊本）卷五～卷六

（人文・社会科学日本古典文学研究室） 小助川 元 太

【凡例】

- 一・底本は奈良県立図書館情報四一号貴重書庫28849/テナカ/1～12により、今回は巻五と巻六を翻刻した。なお、本テキストの巻一から巻四の翻刻については、小助川「〈翻刻〉奈良県立図書館所蔵『帝鑑図説』（巻一～巻四）」（『呉工業高等専門学校研究報告』七〇号、二〇〇八年八月）に掲載している。
- 二・本書には各話ごとに二丁分の挿絵があるが、誌面の都合上今回は割愛し、本文の翻刻のみとした。
- 三・本文には虫損による判読困難なところが数箇所見られるため、京都大学図書館近衛文庫蔵『帝鑑図説和訓』（二巻、慶安三年（一六五〇）、請求番号01-84/テ/1貴）を参照して補った。
- 四・旧字体・異体字・俗字などではできるだけ通行の字体に改めた。  
〔例〕「國」↓「国」、「迨」↓「迄」、「皈」↓「帰」
- 五・底本の誤字などはこれを尊重し、とくに改めなかった。
- 六・カタカナの「ハ」・「ミ」などはひらがなに統一した。  
〔例〕「くはうてい」↓「くはうてい」、「よびしは」↓「よびしは」  
「ミ」↓「したしみ」
- 七・踊り字については、ひらがなで翻刻した場合は「ゝ」「ゞ」、カタカナの場合「ゝ」「ゞ」、漢字の場合は「々」に統一した。また、「く」については、送り仮名と漢字については文字になおし、それ以外はそのままとした。

- 八・読解の便を考慮し、私に句読点等を補った。
- 九・濁点は本文のままとした。
- 十・改丁箇所については明記したが、改行についてはとくに示していない。
- 十一・丁数については、実際の丁数と柱の丁番号にズレが生じているため、実際の丁数を示している。

【書誌】

- 〈形態〉 古活字本。
- 〈巻冊〉 十二冊。ただし、六冊ずつ上下二冊の合本形態。
- 〈丁数〉 巻一のみ序文「帝鑑図説和本序」三丁分あり。その他、各巻ごとに一丁分の目録あり。巻一（二十六）、巻二（二十三）、巻三（三十四）、巻四（三十一）、巻五（三十九）、巻六（四十六）、巻七（三十）、巻八（二十九）、巻九（三十二）、巻十（三十三）、巻十一（二十七）、巻十二（二十一）
- 〈表紙〉 無地黒表紙。
- 〈装幀〉 袋綴。版心に柱題「帝鑑一卷（十二巻）」および丁数あり。
- 〈寸法〉 縦二十八・四糎、横二十・七糎。
- 〈行数〉 毎半葉十一行書き。界線なし。
- 〈外題〉 題簽無地白。左上。「帝鑑圖説 二」「帝鑑圖説 三」ほか。（数字部

分は各巻の巻数) ただし、巻二、九、十、十一は題簽なし。

〔内題〕「帝鑑圖説巻第二」ほか。(数字部分は各巻の巻数)

〔印記〕各巻本文第一丁表右下「奈良縣立奈良圖書館印」

〔刊記〕巻十二本文十九丁裏六行目から九行目まで。

「于時寛永四丁卯年

十一月下旬

洛陽二条寺町誓願寺前

八尾助左衛門尉開版」

〔付記〕『帝鑑圖説』の閲覧・翻刻に際しては、奈良県立図書館の御高配を賜った。また、書誌について高木浩明氏からご教示を賜った。記して御礼申し上げます。本稿は平成二十四年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「中世百科全書的テキストの成立基盤に関する総合的研究」課題番号24520218)による研究成果の一部である。

〔翻刻〕

帝鑑圖説五「(表紙)

帝鑑圖説巻第五目録

弘	文	開	館	唐	乃	太宗
上	書	粘	壁	唐	太	宗
納	箴	賜	帛	唐	太	宗
縦	鵠	毀	巢	唐	太	宗
敬	賢	懷	鶴	唐	太	宗

覽	凶	禁	杖	唐	太	宗
主	明	臣	直	唐	太	宗
縦	囚	歸	獄	唐	太	宗
望	陵	毀	觀	唐	太	宗

撤	殿	宮	居	唐	太	宗
面	付	二	佞	唐	太	宗
剪	鬚	和	藥	唐	太	宗

帝鑑圖説巻第五

弘	文	開	館
---	---	---	---

唐の太宗皇帝とて、御門一人ましますか、つねくおぼしめされるは、じんぎのみちをおこなひ、天下を太へいにおさめん事、がくもんならてはいか、せんとおぼしめされるあひだ、経・史・子・集と申て、四部の書二十餘万巻をあつめさせ給ひて、すなはち御てんのかたはらに弘文館と申てがくもん所をたて給ひて、その時天下にかくれなき虞世・南褚亮・姚思廉・歐陽詢・蔡允恭・蕭徳言とて、此六人の人々は文につけてもならひなく、がくにつけてもくかららず、さいちさい」(二丁表)げい世にきこえ、かくれなかりきものなれば、此人々をゑらみいたさせ給ひて、くわんいをさつげましく、うやまひ給ひけるとかや。かたじけなくも、かさねて又学士のくわんをくだされて、この六人の人々を、よるひるばんにかわりつゝ、こうぶんくわんにやとらせて、二十餘万の書物を一々にせんさくさせ給ふ。さて又、ときのしよくわんにん、まい日さんだい申つゝ、御かどをうやまひたてまつり、太宗いてあひましまして、やうやくたいめんおはりてより、さて其後に、虞世南をひきくし、きうちうふかく人給ひて、よろつの書物をとり出し、いにしへよりのせいじんのいひ」(一丁裏) おき給ひしことのはの、書物にするしおきしを、たがひにせんさくし給

ひて、みちをおこなふはかりこと、天下をおさむるまつりこと、さま／＼ひよ  
うてうなされつゝ、つねにやはんにいたるまで、まどろみ給ふ事もなし。かる  
がゆへに、天下太平におさまる事、申もおろかなるとかや。あるひはらんげき、  
あるときはぶゆふをもつておんできをおもひのまゝにしたがへ、あるひは天下  
をおさむるにはぶんがくをさきとして、まつりことをし給ふゆへ、じんぎ天下  
におこなはれ、しもばんみんにいたるまで、たのしみさかへけるとかや。され  
ばにや、まつだいまてぶんふ二だうの君」(二丁表)とて申つたへし事となり。」  
(二丁裏)

挿絵 「(二丁表)

挿絵 「(二丁裏)

上書粘壁

唐の太宗皇帝の臣下に、衰寂と申ものあり。ある時、太宗衰寂をめしての  
給ひけるには、此ころみづからに書をたてまつり、いさめをなすものおほし。  
あるひは天下の政、又わうぎやうのなすへき事、一々しな／＼かきしるし、  
我をいさむるものあり。我そのいさめのりをかんじ、すへてこれをとりあつめ、  
戸かべのうへにおし、つね／＼いでいりせし時に、おのづからめにふれて、あ  
さゆふ見るによろしふして、天下をおさむるのたよりならめとおもへばなり。  
それつく／＼とおもんみれば、天下四海はきはめてひろきことなら」(四丁表)  
ば、これをよく／＼おさめんは、はなはだもつてかたかるべし。いかんとして  
たみ百姓、たがひにふつきにさかへ、いかんとしてか国々にうれいのわづかも  
なきやうにと、つね／＼おもひくらすゆへ、すこしまどろむひまもなし。ある  
ひはやうくるときにいたつて、わつかに心をやすむといへとも、天下をおさむ  
るのはかりこと、ゆめうつゝにもおこたらず。なんじは今わか臣下として、天  
下の政をはからふ事、すこしもおこたる心なし。いよ／＼そのしよくおこた

らずして、いまわが天下を太平におさめんとのはかりこと、なんじもともにこゝ  
ろをそへ、我をいさむるもの」(四丁裏)ならば、なかよろこばさらめやと、  
おほせけるこそことばりなれ。むかしこうしるとき給ふにも、きみたる事なり  
がたし、しんたる事やすからすと、此ほんもんによそならず。それ天下はひろ  
うして、ばんみんおほしと申とも、まことに天下の君たる人にあらずんば、た  
れかまつりごとのつとめさる事をうれい、それわがこうのはげまさることを  
おそれんや。又臣下としては、つね／＼君にちうせつをつくり、国土をゆたか  
におさめん事をもとめなば、なかかはえさるへけんや。今これ太宗皇帝の、  
衰寂につけ給ふ、そのことのはをきくからに、いにしへ舜王の時、君臣」(五  
丁表)のみちあきらかにして、たかひにうやまひ給ひしも、いかてかこれにま  
さるへし。天下太平におさまる事、申もおろかなるとかや。」(五丁裏)

挿絵 「(六丁表)

挿絵 「(六丁裏)

納箴賜帛

唐の太宗皇帝、はじめてくらるにつき給ふ時、一人の臣下に張蘊古と申せ  
しものあり。しかるに、太宝の箴と申て一篇のぶんをつくりて、太宗をいさめ  
たてまつる。そのことのはにいわく、つら／＼古今の事をおもん見るに、それ  
天子の位をえて、てんかをたもち給ふ事、まことにもつてやすからずや。かる  
がゆへに、おそれつゝしむこゝろなかりしかば、みたりに心まよはされ、よこ  
しまなる事、ほしひまゝなり。たれかしらさらんや、ばんじのわさはひは心を  
ゆるかせにする所よりおこる事を。まことにおもんみれば、聖」(七丁表)人  
はめいを天にうけて、たみのかんなんにおほるゝところをすくひ、人のつみを  
おかすをば、これ我がなせるとがとおもひしも、ばんみんにいたるまで心をく  
ばり、めくむ事、あまねく日月のこくとをてらし給ふに、わたくしなきがごとし。

かるがゆへに、一人をもつて天下をおさめ、天下をもつて一人にほうずとなり。ひそかにあくじをたくみて、此事におゐては人しらすといふ事なかれ。天にみゝあり。たかきにて、ひきゝをきく。たとひあくじをなす事はすくなしといふ事なかれ。小をつんで大となる。たのしみをばきはむへからず。たのしみきはまれば、かならず」(七丁裏) かなしみきたる。よくをばほしひまゝにすへからず。よくしんほしひまゝなれば、かならずわさはひをなす。九重の門をたつるといへども、我かおるところはひぎをいるゝにすぎず。むかし夏の舜王とて、ぶだう第一のてい王にておはしけるが、きんぎんをもつて、てんかくをかざり、くわれいをこのむといへども、天下をおさむる事におゐては、これなんのえきかある。八珍の美食をつらぬといへども、くらふところは一味にすぎず。いにしへ殷の紂王とて、あくわう一人ましますが、えいくわにおごらせたまひて、かすをもつてつゝみをつき、さけを入れていけとなし、かずのふねを「(八丁表) うかべ、あまたの人をこれにのせ、つゝみをうつて、そのさけをのませ、かゝるゆふらんあるゆへに、つゝに天下をうしなへり。内には女色をこのまされ。外には山野のかりをこのみ、うきみやつす事なかれ。えがたきたからをこのまされ。我か身一人たつとして、賢人をあなとる事なかれ。我ひとりちゑありとして、他人のわれをいさむる事をふせがされ。ぎゝたうゝとして、漢の高祖のこどく、くわんちんたいとに心をなし、よろつ天下の事にゐては、うすきこほりをふんで、ふかきふちにのそむかこどく、つゝしみてもなををそるべし。むかし周の文王は、我が心を」(八丁裏) せめて、天下をおさめ給ふとかや。諸人の見るめにあまるあくにんをばちうすべし。諸人の見るめにあまりてよからん人をばしやうくわんせよ。けがらはしうしてくらき事なかれ。いさぎようしてあきらかなる事なかれ。べんりう目をおほふといへども、かたちなきを見、とうくわうみゝをふさぐといへども、こゑなきところをきゝたまへと、かやうにしなくかきしるし、一字ゝにまことをつくして、

君をいさめたてまつる。太宗、蘊古がふかくこゝろをつくしていさめをなすをきこしめし、まことにぎよかんのあまりに、かたじけなくも蘊古にときのほうびとの給ひて、「(九丁表) まききぬ数十ひきくたされ、ならびに内裏寺丞の官にあげさせ給ひしも、ことはりとこそきこへけり。」(九丁表)

挿絵 「(十丁表)

挿絵 「(十丁裏)

縦レ 鬪 毀レ 巢

唐の太宗皇帝の時、しろきからす二疋きたりて、つねにぎよしんならせ給ひし御殿のうへの一樹の枝にすをかけり。しかるに、かの二つのす、則あはせて一になり、たがひにはぶさをかさねてよろこひたのしむありさまなり。又その二つのす、すべて一つにあひぬれば、りやうはうおほきにして、なかはつゝみのだうのごとし。さゆにはんべるしんかとも、此よしを見るよりも、みなく申けるやうは、およそちくるい、てうるいは、たがひにところをならぶれば、かならずそのなかあしゝ。しかるに、いまこの二つのからす、「(十一丁表) そのすをあはせてひとつになり、又そのかたち、しろうして、つねのからすにかはる事、めつらしかりき事なれば、さだめてこれはてんちおんくわのずいさうにて、君のせいとくをかんするゆへ、かやうにこそはあるらめとて、みなくこれによるこび、君をいはひたてまつる。太宗、此由きこしめし、すなはちの給ひけるやうは、いやゝそのぎにてさらになし。むかし随帝とて御門一人ましますが、たゞあけくれすいそうばかりをこのませ給ひて、けんじんをこのみまします。故に国ほろびて、つゝにくらゐをうしなへり。しかるあひた、かの随帝のすいそうこのみを」(十二丁裏) したまひしを、われつねゝこれをそしる。たゞみづからは、いかんともして賢人をもとめてしんかとなし、天下のまつりことをなし、国家のたみをあんらくにして、太平の君といはれんこそ、

これぞまことのずいそうなれ。しかるに、ちくるい、てうるいの、そのなりかたち、つねならすめつらしき事どもとて、なんそやこれをすいそうとして、われをいわひ申事、いはれなしとの給ひて、つるに人々に仰せ給ひて、かのすをこぼちましゝて、からすを野外やくわいにおいはなす。かやうにせさせ給ふ事、ごまつだいのしそんまで、わりなきすいそうをこのまずして、たゞ賢人けんじんをもとめん事をつねゝこゝろにねがふへし。これいましめのためとかや。まことにせんざいばんせいまで、人君じんくんのかゝみとすべき事、いつれかこれにまさるへし。」  
(十二丁表)

白紙 「(十二丁裏)

挿絵 「(十三丁表)

挿絵 「(十三丁裏)

敬うやまつて賢けん懷ふじつにす懐たか鶴たか

唐の太宗皇帝、つねゝたかをこのませ給ひて、心によるこぼしく、あひし給へり。こゝに魏徽きちやうと申て、一人の臣下しんかあり。つねゝ御前まへにしこうして、君のあしき事あれば、いさめを申たてまつる。故かゝるゆへに太宗も魏徽をおそれ給ひけり。ある時太宗、かのたかをみづからすへさせ給ふおりふし、魏徽がきたるよしをきこしめし、すなはちおぼしめされけるは、われ此たかをあひしつゝ、みづからひちにすゆる事、もしも魏徽が見るならば、さだめて我をいましめて、いさめをなさんはぢでうなり。しよせんたゝこのたかを」(十四丁表) 魏徽きちやうにみせしとおほしめし、おりふしにはかの事なれば、すなはちみづからふところのうちへぞかくさせ給ふ。魏徽、やかてこゝろへて、いよゝ御まへをたちさらす、よろつた事をそうもんして、しばらくとゞまりたてまつる。しかるゆへに、かのたかは、ふところのうちにして、いきごもりてそ死ししにけり。それ太宗たいてう皇帝は、くらゐたかくましゝて、天子たりとは申せとも、たまゝたかを

すへさせ給ふあやまりあれば、たゞしきしんかのきたるを見て、おほひかくさせ給ふ事、これその理をあきらかにして、ひれいをしろしめされけり。かるがゆへに、つねゝ心に」(十四丁裏) ふかくあひしたまへるたかなれと、すでに死ししてありけるをかなしみ給ふきしよくもなし。こゝをもつてあんすれば、たかをすへさせ給ふ事は、これ太宗皇帝たいてうていのあやまりなりとは申せとも、まことに臣下しんかのきたるをみて、すでにかくさせたまひけるは、これせいじんのしるへなり。」(十五丁表)

白紙 「(十五丁裏)

挿絵 「(十六丁表)

挿絵 「(十六丁裏)

覽み図ず禁きん杖ちゆう

唐の太宗皇帝、ある時、明堂みやうだう鍼灸しんきうの図書ずしよをひらいて見たまへり。そもゝこの明堂鍼灸の書と申は、もつはらいしやの家にもちいて、人の五臓ごぞうのきうしよをしるし、やまいをぢするのいしよなり。此書しよのうちに、づをえかきて、人の五臓ごぞうのみやくすぢをあきらかにあらはせり。しかるに、五臓六腑ごぞうろくぷのみやくすぢは、すべてせなかにあつまれり。太宗このよし御覽して、おぼしめされけるやうは、にくげに人をむちうつとき、もしもせなかをうつならば、五臓のみやくすぢしんだうして、かならずいのちをうしなふべしとおほし」(十七丁表) めされけるあひた、すなはちてんかへみことのをなされつゝ、いまよりしていごのもの、たとひざいにんありけるとも、せなかをむちうちすべからず。むかしがいまにいたるまで、五けいのはつとたゞしうして、ざい人をせむるには、五つの外ほかにこへさりけり。人のとがのかるきをば、いくつえとかぎりをして、数かずをつもりてむちうてり。しかりとは申せとも、もしせなかをうつならば、かならずいのちをうしなふべしとおほしめされけるゆへに、ふかくきんぜいし給

へり。まことなるかな。太宗は、じひのこゝろをそなはりて、めに見、みゝにきこしめさるゝところまで、人「(十七丁裏)をあはれみ給ふ事、申もおろかなるとかや。いまこのいしよを御らんして、じひのこゝろしのはずして、つゝるに心にきざしつゝ、人をむちうつとがの事、ふかくいましめたまひけり。それ太宗皇帝は、じんぎをもつて天下をおさめ、はつとをおこなひ給ふ事、つゝしみ給ひけるとなり。しかるゆへに、国土ゆたかにおさまりて、めてたかりけるみよとかや。」(十八丁表)

白紙 「(十八丁裏)

挿絵 「(十九丁表)

挿絵 「(十九丁裏)

主明 臣直

唐の太宗皇帝、諸官人のしゆつしるとき、すなはちいでさせたまひつゝ、やうやくたいめんをはり、きうちうへいらせ給ふが、何とかおぼしめされけん、おほきにいからせ給ひて仰せけるには、今日しゆつしを申けるしよくわんにんのそのなかに、ころすへきものありけると仰せられ給ひしかば、こゝに長孫皇后とて、第一のきさきにておほしけるが、このよしをきこしめし、太宗にむかつておほせけるには、たゞ今ころさんと給ふは、いかなるものぞと、い給ふ。太宗、のたまひけるやうは、魏微と申て一人のしんか「(二十丁表)あり。まい日しゆつしを申つゝ、しよくわんにんのかしらにいて、もしみつからが身のうへにすこしもあしき事あれば、ふかくそれをいましめて、われをはずかしむるなり。故に、此ものをころすへきとぞ仰せける。そもく長孫皇后は、けんしやのとくそなはりて、よくそのみちをしり給へり。かるかゆへに、魏張をばちうしんなるものとおほしめされけるあひだ、則御まへをしりぞきて、いはひのいしやうをめしかへて、又太宗の御前にしかふなされて申されけるぞ、

ことはりなれ。みづからこじんのいわひつたへし事をきくに、かみにあきらかなる君あれば、しもに「(二十丁裏)すなをな臣下ありとうけたまはる。いま魏微が心すなをにして、いさめを申あぐる事、これ君の心があきらかにましますゆへ、しんかのこゝろもすなをなり。たゞねかはくは、魏微をころさせ給ふ事、しばらくどまり給ふへし。きみのあきらかに、しんかのすなをにあることは、せんざいふるともまれなるべし。いよくこくとゆたかにして、天下大平ならん事、めてたかりけることなりと、かやうにいわ、せ給ひしかば、太宗このよしきこしめし、皇后の給ふこと、けにもなりとおほしめし、よろこひ給ふはかきりなし。かるかゆへに、魏微をばすなはちゆるさせ「(二十一丁表)給ひけり。つらくおもんみれば、長孫皇后の太宗をいさめ給ふ事は、むかし夏の塗山、周の太姒と申とも、いかてこれにはまさるべし。外にはちうせつしんかあり、うちにはけんしやのきさきありて、天下いよいよおさまりて、たいへいのみよたる事、申もおろかなるとかや。」(二十一丁裏)

挿絵 「(二十一丁表)

挿絵 「(二十二丁裏)

縦 囚 獄

唐の太宗皇帝のとき、我か身のなせるとがにより、ろうしやするものおほかりしかば、一々これをかきたてゝ、しぎいにおこなふべきよしを、君にそうもん申ければ、太宗きこしめされて、ふかくふびんにおぼしめし、まづこのたびは、かれらがいのちをたすけて、ふたゝび家にかへしつゝ、老してありけるちゝは、や、又はさいしにあはすべしとあほしめされて、それよりも、みなくろうしやをゆるされて、我かいへさしてそかへりける。その時、太宗仰せけるには、まづこのたびは、いのちをゆるしてかへすなり。明年「(二十三丁表)の秋になるならば、いそきみやこへあつまるへし。しぎいにおこなひ給はんと、

おほせわたさせたまひけり。又それよりも国々へちよくしをくださせ給ひて、たとひいかなるとがにんも、まづ此たびはゆるすなり。みなくゝい系にかへるべし。来年の秋になるならば、我とみやこへのほりつゝ、かならず死しぎいにおこなはれよと、せんじをくださせ給ひて、ぎいくしよ所々のとがにんまで、みなくゝ家にかへりけり。あはれなるかな、ざいにんども、そのとしくれゆくあくるあきにもなりしかば、おもひくゝに我がやをいて、みやこへこそほのぼりけり。以上そのかず三百（二十三丁裏）九十人とかや。これと申もすきしとし、かれらかいのちをのがされて、家にかへさせ給ふゆへ、君の御おんをかんにつゝ、のがれかくるゝものもなく、みなみなみやこへあつまりて、ちうせられんとおもふこそ、ことはりとこそきこへけり。太宗このよし御覽して、さてもふびんのしたいかな。ひとりものがれかくれずして、いま又かやうにあつまる事、あはれなるありさまなれ。しよせんたゝかれらをはゆるすへきとおぼしめし、みなくゝとがをゆるされて、ひとりも死しするものはなし。それつらゝおもん見れば、とがをしつみをまねくものは、天下第一のあくにんなりとは（二十四丁表）申せとも、しする事をうれいすして、みなくゝかやうにあつまる事、君一人のなさけにより、その御おんをほうせんため、いのちをおしむものはなし。これをもつて見るときは、天下のあるじたる人は、じひのこゝろをさきとして、そのおんたくをほどこさば、大平のみよたらん事は申をよばさるとかや。（二十四丁裏）

挿絵 「二十五丁表」

挿絵 「二十五丁裏」

望のぞんで 陵りやう 毀やぶる 觀くわんを

唐の太宗皇帝の御きさきに、張孫皇后と申せしあり。御門みかどちやうあひあさからず。しかるに、長孫皇后すでにむなしくなり給へり。太宗ふびんにおほ

しめして、文德皇后とおくり名をつけ給ひて、昭陵しやうりやうと申ところには御はかをたてさせたまへり。しかるに、このきさきと申は、まことにけんしやにましゝて、世にたぐいなき事なれば、太宗おしませ給ひて、あまりおもひにたへかね、はなぞのうちにてなをたかくたてさせ、つねくゝこれへのぼらせ給ひて、かの皇后のましませしみはかところの昭陵しやうりやうをつくくゝなかくて（二十六丁表）おもひをなぐさめ給ひけり。然るに、太宗、魏微ぎぢやうと申臣下しんかを、あるときぐそくなされて、かのうてなにのほりたまへり。しかるに、太宗、魏微におほせけるやうは、なんじが目にもあきらかに、あのしやうりやうが見ゆるかとの給ひしかば、魏微、このよしうけたまはり、つくくゝこゝろにおもふやうは、さても我が君太宗は、そのちゝはゝのみはかをば、獻陵けんりやうと申所にたて給ひしかども、まことに父母ふほの御事は、おもひもいたさせたまはずして、なんぞやきさきの御事をば、おもひわすれ給はず、かやうに高くうてなをつくり、つねくゝのほらせたまひて、しやうりやうをなかく（二十六丁裏）まします事、きさきにおもひふかふして、おやにおもひのあさき事、心ことばもよばれず。いかんともしてこの君をいさめばやとおもひつゝ、やゝありて申けるには、我としまかりよりぬれば、りやうがなかすみてあきらかならず。いづくならんとのそめとも、さらにみゆる事なしと申あげたてまつれば、太宗まこと、おほしめし、みつからゆびをさして魏微ぎぢやうにをしへ給ひけり。魏微すなはち申けるには、今我が君の二人の父母ふほの御はかをば獻陵けんりやうにたて給ひしゆへ、二人のふぼの御事をこひしくおほしめされつゝ、かやうにたかくうてなをたて、つねくゝ（二十七丁表）のほらせ給ひて、けんりやうをのそましますかと、みつからこゝろにぞんずれば、たゞいまをしへ給ふをも、さぞけんりやうにてあるらめと、心をつくしてなかくめしなり。きさきのみはかところとは、まことにおもひもよらさりし。そのしやうりやうの事ならば、おしへ給はぬそのさきに、つぶさに見たてまつると、こゝろのうちにごんするを、ありのまゝにぞ申ける。太宗、魏微が

二人のふぼの御事を、申いたすをきこしめし、にはかにふぼの御事を、おもひいたさせ給ひつゝ、おほえすなんだをなかせられる。しかるに、太宗、つら／＼おほしめされけるは、しやう」(二十七丁裏)りやうをのぞまんために、うてなをたて、ありけるは、これ我かふかきあやまりと、おほしめされけるあひた、すなはちうてなをこぼたれて、ふたゝびのぼらせたまはざりしも、ことはりとこそきこえけり。まことに太宗皇帝、もとよりおやにかうの君なれとも、たま／＼きさきのおもひにふれて、おやのかうをわすれしかとも、魏徴がいさめをき、給ひて、太宗けにもとおほしめし、そのあやまりをあらためて、つるにきさきの御事を、おもひわすれ給ひけり。」(二十八丁表)

白紙 「(二十八丁裏)

挿絵 「(二十九丁表)

挿絵 「(二十九丁裏)

撤<sup>しあいて</sup>殿<sup>てんを</sup>營<sup>いとなむ</sup>居<sup>まを</sup>

唐の太宗皇帝の臣下に、魏徴と申ものあり。君にちうせつをつくして、つね／＼いさめを申ける。故に太宗も魏徴をうやまひまし／＼て、君臣のみちあさからず。しかるに、太宗、魏徴がつねにすまぬする、そのいゑまことにいやしうして、ことさら堂ののなきよしをきこしめし、おりふしそのとききんちうに、御殿をたてさせたまひしが、まづその御てんをやめ給ひて、則御殿のさいもくを、魏徴がところへおくり、たかどのをたて、ゑさすへきとのせんじにて、さてそれよりもさいもくを、魏徴のところへもちこび、こゝをせん」(三十丁表)ど、いそぎける。しかるあひだ、日数ほどなく五日かうちに、すみやかにこそじやうじゆせり。又太宗おほしめすには、魏徴はもとよりおごらすして、ゑいぐわをこのまぬものなれば、くわれいなるだうくをば、たとひおくりてあればとて、さだめてこゝろにかなふまじと、おほしめされけるあひだ、

しらぢの屏風と、又は、しとね、おしまずき、つえなどをとりそろへて、魏徴にをくり給ひけり。魏徴、きみの御おんをかんして、表書をかいてたてまつり、かたじけなき由を申あけしかば、太宗、このよしゑいらんまし／＼て、手づから返事をかき給ふ。そのことのはにいはいく、」(三十丁裏)なんじはこれ、我がしんかとして、つねに天下の政をなし、今国土ゆたかにおさまる事は、これみななんじがなすところなり。しかるときは、いかてか我なんじをうやまはさらめや。一つはてんかのため、ひとつはばんみんを、あんのんならしめんがためなり。なんぞかやうにわれをじやすると、おほせ給ひしことのは、世にたぐいなき次第なり。それ天下の君として、臣下をたいせつにおほしめされける事は、つねに臣下のいさめをき、よくそのみちをおこなひ給ふゆへ、つゝしみをもつはらにして、れいぎをつくせり。ちうしんのうやまふは、太平のもとになり。いま太宗」(三十一丁表)皇帝、魏徴と申しんかを、ふかくうやまひまし／＼て、れいぎをつくし給ふ事、これも魏徴かつね／＼ちうせつをつくして、きみをいさめ申ゆへ、君臣のみちあきらかにして、たかひにうやまひつゝ、しめり。」(三十一丁裏)

挿絵 「(三十二丁表)

挿絵 「(三十二丁裏)

面<sup>まのあたり</sup>付<sup>しりぞく</sup>二<sup>ね</sup>佞<sup>ねい</sup>臣<sup>しんを</sup>

唐の太宗皇帝、あるとききんちうをしのびいでさせたまひて、一樹のもとにたゝすみ、木々のこすゑの時をえて、枝をならべ、葉をかさねてしけりたるを御らして、一しほこゝろによるこばしくもあそび給ふところに、宇文士及と申一人の臣下ありけるが、此よしを見るよりも、いよく君をなぐさめ申さんとおもひけるにや、かたはらよりもすゝみいて、こゝの木々、かしのこすへをさして申けるには、さても木々のこすへまで、かやうにしげみさかん

にして、まことにゆゝしきていかなと、くりかへし」(三十三丁表) くりかへし申ける事やまざりしかば、太宗、此よしきこしめして、おぼしめされけるやうは、しきうが心、けいはくにして、ねいじんなるものと、やかてさとらせ給ひて、こゝろのうちにはかれをにくませ給ふ事、申もおろかなるとかや。故に、太宗はきしよくをひきかへましゝて、則かのしきうをおいしりぞけ、まのあたりにはかなふましといからせ給ふことはりなり。なをもしきうをはづかしめておほせけるには、つね〱魏微ぎぢやうがみづからにむかつて申けるには、かならずねいじんなるものをば、つねにちかつくへからず。とをくおんごくへおいしりぞけよといひ」(三十三丁裏) しかども、われそのしきいをしらすりしが、いまはじめてそのゆへをしる。なんじはこれねいじんなり。かかる一樹のすこしきを見て、あまりにふかくほむる事は、なんじがこゝろすなをならず、けいはくふかきものなり。魏微がつね〱ねいじんといひしものは、なんじが事にあらずして、たれをかさしてうたがふべし。しきうこのよしうけたまはり、にはかにつゝしみおそれつゝ、あまりのことたへかねて、すなはち君の御まへにて、かうへをうつてちを出して申けるには、これ我がふかきとがなり。御ゆるしましませとひれふしてこそ申ける。つら〱」(三十四丁表) おもん見るに、まことにくちのさがしきものは、三寸のしたをもつて国天下をもほろぼせり。かるがゆへに、孔子こうしのいわく、りこうのはうかをくつがへす事を。又いはく、ねいじんをとをぎけよと、とき給へり。それ人のしんかとして、かならずねいじんなるものは、もつはら主人しゆじんのこゝろをうかゞひて、いつわりをたくみ、ことばをかざり、しゆじんの心をよろこばしめ、ときのいせひにおごりける。かるがゆへに、理をまげてひとなし、くろきをさしてしろきといひ、ちうせつなるものをばいひかすめ、うらみしものをはあたをなす。しかるあひた、国ほろび、てんかにらんを」(三十四丁裏) おこすなり。こゝをもつて、聖人はふかくねいじんをいましめ給ふ事は、どくのさけをおそれ、どくじやおおそるゝ

がごとくにして、ねいじんにちかづかず。それ太宗皇帝も、しきうごときのねいじんをは、とをくしりぞけ給ふ事は、これせいじんのしるしなり。」(三十五丁表)

白紙 「(三十五丁裏)

挿絵 「(三十六丁表)

挿絵 「(三十六丁裏)

剪鬚和葉

唐の太宗皇帝の臣下に、李世勣と申して、一人の功臣あり。あるとき世勣おもきやまひにふして、はう〱のいしやをあつめて治すといへともかいぞなし。しかるに、いしやの太宗へそうもん申されけるは、種々のひほうをつくすといへとも、さらにゑきなし。しかりとは申せとも、人のひげをきりて、はいにやき、これをくすりにもちるなば、さうなふ世勣がやまひをば、はいゆふ申さんとありしかば、太宗このよしきこしめし、世勣がやまひだにさうなふはいゆふするならば、なにをかさらにおしむべきとおほしめされ」(三十七丁表) けるあひだ、かたじけなくも太宗の、われとわか身のひげをきり、すなはちはいにやきたまひて、李勣にあたへてくすりにせさせ給ひしかば、さうなふやまひはいゆふせり。然るに、李勣、君の御おんをかんじ、御前にしかうして、わがかうべをうちて、ちをいだし、なんだをなかけて、かたじけなきよしを申あげしかば、太宗、このよし御覽して、すなはちおほせけるには、われ今天下を太平におさめしも、ばんみんなにいたるまでのしみさかへける事は、これみななんじがはからひなり。しかるときんば、なんじだにあんらくなれば、てんかも又あんらくなり。我がひげをきつて」(三十七丁裏) なんじがやまひを治する事は、天下しやしよくのためなり。なんじ一人のわたくしのためならず。しかるに、なんぞわれをふかくじやするぞと仰せ給ひしことのは、なをあさ

からぬ御事なり。まことに孟子のとくことく、君のしんかを見る事、我がしゆ  
そくのことくする時は、臣下又君を見る事は、我がふくしんのことくといへ  
り。いま太宗皇帝の李勣がやまひをうれい給ひて、みづからひげをきり、李  
勣にあたへ給ふ事、まことに臣下を見ることしゆそくのごとし。故に李勣も  
又、きみをみる事ふくしんのことくにして、つねくちうをつくして君をうや  
（三十八丁表）まひたてまつる事、申もおろかなるとかや。

帝鑑図説巻第五終 「(三十八丁裏)

挿絵 「(三十九丁表)

挿絵 「(三十九丁裏)

帝鑑図説六 「(表紙 外題)

帝鑑図説巻第六目録

遇 <sup>あひて</sup> 物 <sup>もの</sup> 教 <sup>におし</sup> 儲 <sup>へ</sup>	唐 <sup>たう</sup> の太宗 <sup>たいそう</sup>
遣 <sup>しむ</sup> 歸 <sup>かへ</sup> 二 <sup>に</sup> 方 <sup>ほう</sup> 士 <sup>し</sup>	唐 <sup>たう</sup> の太宗 <sup>たいそう</sup>
焚 <sup>やき</sup> 銷 <sup>しき</sup> 銷 <sup>けす</sup> 金 <sup>かね</sup>	唐 <sup>たう</sup> の玄宗 <sup>げんそう</sup>
委 <sup>い</sup> 任 <sup>にん</sup> 賢 <sup>けん</sup> 相 <sup>しやう</sup>	唐 <sup>たう</sup> の玄宗 <sup>げんそう</sup>
兄 <sup>けい</sup> 弟 <sup>てい</sup> 友 <sup>ゆう</sup> 愛 <sup>あい</sup>	唐 <sup>たう</sup> の玄宗 <sup>げんそう</sup>
召 <sup>めして</sup> 試 <sup>こころむ</sup> 二 <sup>に</sup> 縣 <sup>けん</sup> 令 <sup>れい</sup>	唐 <sup>たう</sup> の玄宗 <sup>げんそう</sup>
聽 <sup>きいて</sup> 諫 <sup>いさめ</sup> 散 <sup>はなつ</sup> 鳥 <sup>とり</sup>	唐 <sup>たう</sup> の玄宗 <sup>げんそう</sup>
陷 <sup>ふくんで</sup> 餅 <sup>もち</sup> 惜 <sup>おしむ</sup> 福 <sup>さいわひ</sup>	唐 <sup>たう</sup> の玄宗 <sup>げんそう</sup>
燒 <sup>やいて</sup> 梨 <sup>なし</sup> 聯 <sup>つらぬ</sup> 句 <sup>く</sup>	唐 <sup>たう</sup> の肅宗 <sup>しよく</sup>
不 <sup>す</sup> 受 <sup>うけ</sup> 二 <sup>に</sup> 貢 <sup>かう</sup> 獻 <sup>けん</sup>	唐 <sup>たう</sup> の憲宗 <sup>げんそう</sup>
遣 <sup>して</sup> 使 <sup>つかい</sup> 賑 <sup>をき</sup> 恤 <sup>いめくましむ</sup>	唐 <sup>たう</sup> の憲宗 <sup>げんそう</sup>
延 <sup>えん</sup> 英 <sup>えい</sup> 忘 <sup>わす</sup> 倦 <sup>うむ</sup>	唐 <sup>たう</sup> の憲宗 <sup>げんそう</sup>

淮<sup>わい</sup>蔡<sup>さい</sup>成<sup>せい</sup>功<sup>こう</sup> 唐<sup>たう</sup>の憲宗<sup>げんそう</sup>「(目録裏)

帝鑑図説巻第六

遇<sup>あひて</sup>物<sup>もの</sup>教<sup>におし</sup>儲<sup>へ</sup>

唐<sup>たう</sup>の太宗<sup>たいそう</sup>皇帝<sup>ていおう</sup>、晋<sup>しん</sup>王<sup>わう</sup>をたて、太子<sup>たいし</sup>となされ給ひしとき、しよじばんたんの

事の理<sup>ことわり</sup>を、太子<sup>たいし</sup>にをしへ給ひけり。ある時太子<sup>たいし</sup>、御膳<sup>ごぜん</sup>にむかひ給ふ時、太宗<sup>たいそう</sup>仰<sup>おほせ</sup>せけるやうは、てんかの農人<sup>のふじん</sup>としをふるまで、そこばくしんらうをつとめ、田<sup>いり</sup>をたがへし、くさきりて、ごくのみのるをえて、かるがゆへに、この飯<sup>いひ</sup>あり。

なんじ、もし膳<sup>ぜん</sup>にそなはる時は、すなはちたみのかんなんをおもひ、飯<sup>いひ</sup>をたやすくすべからず。しかる時は、天道<sup>てんたう</sup>も、なんじがものしる事<sup>こと</sup>をかんし給ひて、つねにこの「(一丁表) 飯<sup>いひ</sup>をあたへてうゝることなるべし。又、太子<sup>たいし</sup>の馬<sup>ま</sup>に

のらせ給ふを御らんして、太宗<sup>たいそう</sup>仰<sup>おほせ</sup>せけるやうは、それ馬<sup>ま</sup>はちくるいなりとはいへども、ものしる心<sup>こころ</sup>そなはれり。なんじ馬<sup>ま</sup>にのるときは、かならず馬<sup>ま</sup>のつかれをかんじて、みちをゆくともかぎりなし、とをくはしらすべからずして、馬<sup>ま</sup>の力<sup>ちから</sup>をつくさざれ。しかる時は、てんたうもなんじがじひなるこゝろをかんじ給ひて、つるに馬<sup>ま</sup>にのらしむべし。又、太子<sup>たいし</sup>の舟<sup>ふね</sup>にのらせ給ふを御覧<sup>ごらん</sup>して、太宗<sup>たいそう</sup>おほせけるやうは、水<sup>みづ</sup>はもとよりふねをのせ、舟<sup>ふね</sup>はみづにうかふといへとも、

水<sup>みづ</sup>又よくふねをくつがへす。しかるときは、ふねも又水<sup>みづ</sup>に「(一丁裏) よることやすからすと。こゝをもつてあんずるに、天下<sup>てんたう</sup>のたみ百性<sup>ひやくしやう</sup>、すなはちこれを

水<sup>みづ</sup>にたとへり。又、天下<sup>てんたう</sup>の君<sup>きみ</sup>たるものを、則<sup>すなはち</sup>これを舟<sup>ふね</sup>にたとふ。君<sup>きみ</sup>もしじひをさきとして、ばんみんをめぐみなば、ばんみんこれをのせずといふ事なし。君<sup>きみ</sup>もしあくぎやくぶたうにして、はんみんをめぐまざるときは、ばんみんも又、

君<sup>きみ</sup>を見ることあたのごとくにして、かならずむほんをおこすへし。こゝをもつて水<sup>みづ</sup>にたとへり。水<sup>みづ</sup>よく舟<sup>ふね</sup>をのすといへとも、又よくふねをくつがへす。然<sup>しか</sup>る

あひた、天下<sup>てんたう</sup>のきみは、つゝ、しまずんばあしかるへし。又、太子<sup>たいし</sup>の一樹<sup>いっしゆ</sup>のしたにたゝすみ給ふを御らんして、「(二丁表) 太宗<sup>たいそう</sup>仰<sup>おほせ</sup>せけるやうは、それよろつ

339 (10)

木のなかに、はじめよりまがらずして、すなをなる木はためしなし。しかりとはいへとも、ばんじやうの手に入て、すみかねをもつて、ためなをし、けつりなをして、すなをにし、これをもつて、宮家をつくる。それ天下の君たるものは、ふかく宮中きうちゆうにゐて、あまねくてんかのまつりごとをしらずといへとも、しんかにちうせつのものであれば、君のぶたうをいましめて、あくじを見てはいさめをなす。しかるときは、君たるものもしんかのいさめをきゝれて、つねにちうしんにしたがはゞ、そのちゑひゞにあきらかにして、あまねくしり、「(二丁裏) ひろくみて、をのづからせいじんとなるへき事、こればんじやうの、まがれる木をためなをして、すなをにするがごとくなり。今これ唐の太宗の、太子ををしへ給ふ事、あさからざりし御ことの葉、ばんぜいまでのをしへたり。」

白紙 「(三丁裏)

挿絵 「(四丁表)

挿絵 「(四丁裏)

遣つひ歸かへ二方ほう士し

唐の太宗皇帝の時、天竺国より道士一人きたりけり。その名を娑婆寐さばみと申ける。しかるに、娑婆寐申けるには、われ不老不死のくすりのひほうをつたへしるといひしかば、此由を太宗皇帝へそうもん申たてまつる。太宗きこしめされて、はじめはまことゝおぼしめし、さらば人をつかはして、まづやくしゆをあつめ給はんとおほしめされけるあひだ、すなはち婆羅門の国々へあまたの人をつかはされ、くすりをとりよせましゝて、かの娑婆寐をめされて、さらばふらうふしのくすりをあはせてまいらせ」(五丁表) よとありしかば、娑婆寐さばみうけたまはりて、くすりをあはすといへ共、つゐにじやうじゆせざりしかば、すなはちかの娑婆寐をほんごくへおいかへし給へり。其後高宗皇帝御くらゐに

つき給ひしとき、又かの娑婆寐、みやこへきたりて、ふらうふしのくすりをもつて、御門にまみえ申べきとありしかば、高宗このよしきこしめし、いつわりならんとおほしめし、つゐに禁中へ入れたまはつ、すなはちかへさせ給ひけり。このとき御門、李勣をめされての給ひけるには、むかしがいまにいたるまで、しやうずるものはかならず死す。こゝをもつて見るときは、不老不死の」(五丁裏) 葉とやらんは、まことにこれいつわりなり。むかし秦の始皇、又、漢の武帝のとき、神仙のくすりをもとめんとして、一しやうのあひだ、心をつくし、力をつゐやし給ひしかとも、ひとつもそのしるべなし。もし不老不死のくすりが、いつはりにてなきならば、たれやの人か、このくすりをのみ、おいもせず、しゝもせて、いままで浮世になからへて、いまいづくにかありけると、ことこまかにぞの給ひける。李勣こたへていわく、君のおほせ、もつともなり。この娑婆寐、一ばんにきたりし時は、いまだかたちもわかゝりしが、又このたびきたるをみれば、をのづから年もより、そのかたちも」(六丁表) おとろへて、びんはつもしろくなり、すぎつるとしとおなしからす。かれもしふらうふしのくすりあらば、まづ我がとしをわかくして、かやうにかたちかはるまし。よくゝおもへばいつはりなり。君のきはせ給ふ事、もつともなりと申ける。そのゝちかの娑婆寐、かさねてみやこへきたる事あたはずして、我かやにかへりてつゐにむなしくなりにけり。こゝをもつて見る時は、不老不死のくすりやらんは、これ世の中をへつらふ人のちやうあひをもとめんため、いつたん天子をたぶらかし、我か身つきにならんとのはかりこと、見えにけり。それ天下の君」(六丁裏) としては、まことに心をいさぎよく、よくしんにまよはずして、つねに食事をつゝしまば、かならずその身けんごにして、いよく壽命ながるべし。むかし五帝三皇の天下をたもち給ふ事、長久にましゝて、その名をばんぜいにのこしけるは、不老不死の薬より、なをたのもしうぞきこえけり。」

(七丁表)

白紙 「(七丁裏)

挿絵 「(八丁表)

挿絵 「(八丁裏)

焚<sup>やき</sup> 錫<sup>ししき</sup> 銷<sup>けす</sup> 金<sup>こかね</sup>

唐の玄宗皇帝、はじめてくらゐにつき給ふ時、いにしへよりの風俗のゑいぐわにおごり、くわれないなるを御覽して、御こゝろのうちにはなはだにくませ給ふ。かるがゆへに、金銀をもつてかざりたりしだうぐなどをば、ことごとくめしあつめたまひて、みなくこれをいどころかし、もしもぢんたうある時は、此きんぎんをもちいて、国のつゐゑをおぎなへり。あるひは蔵につむところの玉や錦のおほかりしを、ことごとくとりあつめ、御殿のまへにつみかさねて、火をもつてやきすて、今よりいごにいたるまで、宮中の「(九丁表) 后たち、をよぶもをよばさりけるも、にしきをもつて身をかざり、ゑいくわにおごるべからずと、そのいましめにかくはかり、又、それよりも天下へせんじをくださせ給ひて、上下ばんみんおしなへて、珠玉をたからとし、にしきをもつて身をかざる事、ふかくきんせいになされけり。又、長安・洛陽の二つのみやこのにしきをおる家までも、せんしをくだしてやめさせ給ふ。つらくあんするに、玉や錦といふものは、いつたん人のめにみちて、はなやかなるとは申せとも、きはめてなんのゑきもなし。それ天下の君たる人、ひとたび心によろこばしく、くわれいをこのみまし」(九丁裏) まさば、かならずよくしんにまどはされ、たまのざいほうをうばいとり、一人ゑいぐわにおごりて、天下の人をくるしむへし。かみをまなふしもなれば、しもばんみんにいたるまで、君のおこりにひかされて、我おとらしとゑいくわをなし、もしもざいほうつきて我が身まどしくなるならば、人のたからをぬすみとり、わが身かへつてせつがいにおこなはれんは、ぢでうなり。こゝをもつて、玄宗皇帝の、おこりをいましめ給ふ事、

ことほりとこそきこえけり。」(十丁表)

白紙 「(十丁裏)

挿絵 「(十一丁表)

挿絵 「(十一丁裏)

委<sup>い</sup> 任<sup>にんす</sup> 賢<sup>けん</sup> 相<sup>しやう</sup> 一

唐の玄宗皇帝、くらゐにつかせ給ふ時、みづから心をはげまして、天下をおさめ給ひけり。しかるに、姚元之と申て一人のしんかあり。けんしや人にすぐれてさいげい世にならびなし。かるがゆへに、元之を宰相のくわんになさせ給ひて、天下の事におゐては、ばんじにつゐて元之をめされてとい給ふ。元之もとよりさいのふあつて、よくてんかの政をいたせり。又、君よりもよろつの事をとい給ふに、御返事をいたす事、ひゞきのこゑにしたがふがごとし。同官のものども、そのかずおほくありけれども、元之にをよぶ」(十二丁表) ものはなし。玄宗もつはら元之をうやまひましくて、よろつてんかの事におゐては、元之次第になされけり。あるとき元之、そうもん申けるやうは、あの小官のものどもを、めしあげ給ひて、くわんいをさつて給はれかしと、ぢきに君の御まへにて、二三度そうもん申ければ、玄宗なにとも御返事もましまさず。たゞ御かほをふりあけて、御てんをながめておはしけり。元之、此よし見るよりも、こゝろにおもひけるやうは、われいまそうもん申せし事、君の心になはすして、われをあやしみ給ふかや。もし然るものならば、つみせられんはぢでうなり。しよせんこの事を二(十二丁裏) 度申あげじとて、いそぎ御前をしりそぎて、わがやをさしてぞかへりけり。こゝに高力士と申て、一人の臣下あり。元之がことをきくよりも、いそぎ玄宗の御まへにしかうして申あけるやうは、君いま御くらゐにそなはりたまひて、ばんきのまつりことをおこなひ給へり。しかるに、元之宰相がそうもん申けるところに、よしともあしとも御

返事もまします、うちあをぬひて御てんをなかめて御座ある事は、これはなはたひれいなり。玄宗此よしきこしめしての給ひけるには、よろつ天下の事におゐては、元之がはからひ次第なり。もし一大事の事あらば、我に「(十三丁表) そうもん申つゝ、たかひにひようぎすべきよし、つねつね元之に申せしかども、などさやうにはあらずして、数にもたらぬ小官ともをくわんにすゝめたきよしを、一々われにそうもんす。よろつのことにおゐては元之次第とあるからは、この小官のものともをも、ともかくもはからはずして、われにそうもん申こと、いはれなきとおもひつゝ、さして返事もせざりしと、おほせ給ひし御ことのは、元之が身にとりてはかたじけなきしたいなり。元之かやうにあらめとは、ゆめうつゝにもしらざりしが、高力士がそうもんによつて、きみのせんじをうけたまはり、なゝめ」(十三丁裏) ならずによろこひけり。まことなるかな、玄宗のよろづにつゐて、さいしやうのはからひにしたがひ給ふ御事は、これ君たるへきみちをしろしめさるゝゆへなり。これと申も元之をば、世にならびなきけんじんと、おほしめされけるあひだ、ばんじをまかせ給ふ事、てんかたいへいならん事を、おほしめされければなり。」(十四丁表)

白紙 「(十四丁裏)

挿絵 「(十五丁表)

挿絵 「(十五丁裏)

### 兄弟友愛

唐の玄宗皇帝、いまだ御くらゐにそなはりたまはぬいぜんより、もろくの御兄弟と御申したしくまします。いま又くらゐにそなはり給ふと申せとも、御兄弟の御なかおろそかなる事はなし。あまつさへ、御くらゐにつき給ひてより、ながき枕とおほひなるふすまをつくらせ給ひて、もろくの御兄弟とつねに一しよにやとりたまへり。又はおきさせ給ふにも、あるひは御膳にむか

はせ給ひて、食をすゝむるときだにも、たかひにおなしうしたまひて、はなれ給ふ事もなし。しかるに、玄宗の御おとうとに、薛王業と「(十六丁表) 申せしあり。あるとき薛王業やまひのゆかにふして、いたませ給ふはかぎりもなし。玄宗あはれみましまして、すはなちみづから御くすりをせんじて、王業にすゝめたまへり。玄宗くすりをせんじさせ給ふ時、にはかに風きたりて火をふきちらし、玄宗の御ひげをやきしかば、左右の人々此よしを見るよりも、おどろきあはてゝたちより、ひをはらはんとせしかば、玄宗仰せけるやうは、たゞねがわくは、王業の此葉をぶくしたまひて、やまひそくじにへいゆふせば、我がひげをやかん事はすこしもくるしからすと、かくのたまひし御ことは、御兄弟の御なかのしたし」(十六丁裏) きども、なかくのたもとへをとるにためしなし。つらくそれおもんみれば、兄弟はもとこれおなしはらよりしやうずれば、などかはうとまさらめや。故に、むかし舜王と申せしは、おとうとをしたしみ給ひて、くらゐをたかくすゝめ、そのいへをとませり。又おとうとにうれいある時は、あに舜王もともうれい、又よろこびあるときは、舜王もよろこび給ひて、したしき事はかぎりもなし。いまこの玄宗皇帝も兄弟したしくまします事、などかはおとり給ふへし。」(十七丁表)

白紙 「(十七丁裏)

挿絵 「(十八丁表)

挿絵 「(十八丁裏)

### 召試二縣令

唐の玄宗皇帝の時、諸官人のその中より、二百餘人をゑらみいたさせ給ひて、国々の守護を仰せつけられ給ひしが、玄宗、こゝろにおぼしめすには、所の守護をするものは、がくもんなくてぶたうなれば、かならずたみをりふじんに、せつがいせんはぢでうなりと、つねくおほしめされける。かるがゆへに、こ

のたびあらたにゑらみいたさせ給ひたる、二百餘人のしゆごともを、ことごとくくめしよせ給ひて、御殿のまへにめされけり。然るに、玄宗みづからだいをいださせたまひて、まづこゝろみに、たみをおさむるのはかり」(十九丁表) ことをもつて、ぶんをつくらせ給ひけり。しかるに、二百餘人のそのなかに、韋濟と申ものありしが、ぶんのことばも理をせめて、まことに花やかなりければ、玄宗系いらんましゝて、二百餘人がそのうちにて、第一ばんにぞすぐられけり。かるがゆへに、韋濟をば、みやこのきないに醴泉縣といふところのしゆごになさせ給ひけり。そのうち百人のものともは、ぶんもまことに中なれば、すなはち中官になさせたまひて、かさねてかれらが功をなすを見たまへり。又、その四十五人をは、ぶんもきはめてあしければ、すなはち下官におかせ給ひて、もつはらがくもんせさせ給ふ。」(十九丁裏) ところの守護となる事をは、まづぐゝやめさせ給ひけり。又、のこり五人のもの共と、そのほか史官のものどもに、おほせつけさせ給ひて、もしも所のしゆごをして、くるしからざるものあらば、かならずたつねいだして、そうもん申せとありしかば、則せんじにまかせて、はうぐゝをたつねけり。しかるに、けんじんをもとめ出してすゝめあぐるものあれば、ともにくわんにあげ給ひて、ほうびをくだされ給ひけり。又ぐちなるものをすゝめあぐるものあれば、ともにはつとおこなはる。かやうになされけるあひだ、ざいぐ所々のしゆごまでも、じんぎのみちをおこ」(二十丁表) なひて、ところのたみをめぐみけり。かるがゆへに、天下太平におさまり、国土ゆたかなる事は申もおろかなるとかや。」(二十丁裏)

挿絵 「(二十一丁表)

挿絵 「(二十一丁裏)

聴 諫 散 鳥

唐の玄宗皇帝、あるときおほしめされけるは、江南といふところに、かも

めや水鳥のあまたあるとききく。しからばかの水とりをとりよせて、その内にかはせつゝ、我常々みゆきして見るに、心をなぐさめて、もてあそばんとおほしめし、すなはち江南へちよくしをくたさせ給ひて、所のたみに仰せつけ、いかんともして、此とりをとりて、さうぐゝみやこへのほすへぎとの事なれば、たみ百性はうけたまはり、君の仰せをそむかして、あけくれこの水とりを、とるへきやうのはかりことに、こゝろをつくし身をやつして、」(二十二丁表) みだれさわぐありさまは、ふびんなりける事とかや。しかるに、汴州と申所の守護人に、倪若水と申ものあり。江南のたみひやくしやう、かのみづとりに心をやつすを見るよりも、あまりふびんにたへかねて、おそれながらも玄宗へ、いさめの書をたてまつりて申けるには、今こうなんのひやくしやうとも、身にはころもをちやくせず、くちにはしよくするにたらずして、うへこへたるありさまなり。又、おのこは田をたかやし、女はくはをとり、かいこをして、にんぐゝのつとめをすみやかにせん事こそ、これたみたるものゝしよくなるに、しかるを天子より、かの水鳥を」(二十二丁裏) とりて、ふなぢからも、くがからも、しゆくをくりにつかまつり、いそぎみやこへのぼせとのせんじなれば、たみ百性も君の仰せをそむかして、あはてさわぐありさま、みるめもあはれなるとかや。然るに、あなたこなたのみちゆき人、此よしを見るよりも、そのくちぐゝに申けるには、さても我が君玄宗は、たみのいのちをかるんじて、とりをおもんじ給へり。まことに人をばいやしくして、とりをたつとみ給ふ事、これたみのしよくをばすゝめずして、ゑきなきものをこのませ給ひて、君の聖徳をくらませりと、かやうにみなぐゝ申と、ありのまゝにかきあげたてまつる。」(二十三丁表) 玄宗、若水がいさむる事をきこしめし、ふかく心にかんじさせ給ひて、けにもなりとおほしめし、すなはち若水にときのほうびをくたされけり。又、かのあつめ給ひし水鳥をも、皆々はなさせ給ひて、二たびとらせたまはず。つらぐゝあんするに、むかし周の召公と申せしは、武王をいさめて申さ

れけるには、それ天下の君としては、いぎやうのものをたつとますして、つねにもちいる所のものを、いやしうせずんば、すなはちたみまんそくすべし。又、世にめつらしき鳥けだものを、国にやしなひ給ふべからずと、かやうに君をいさめたまへり。いま此玄宗皇帝も、水鳥を「(二十三丁裏)かはせ給ふといへとも、若水がいさめをき、則はなさせ給ふ。まことなるかな、玄宗の臣下のいさめにしたがひ給ふ事は、水のなかれにしたがふがごとし。それ天下の君としては、つねにゑきなき事をこのますして、あけくれたみをあはれみ、我心をいさぎよくして、よくしんにまよはず、たみのざいほうををうば、ずんば、天下のたみもあんのんにして、太平の御世たらん事はうたがひさらになかりけり。」(二十四丁表)

白紙 「(二十四丁裏)

挿絵 「(二十五丁表)

挿絵 「(二十五丁裏)

啗餅 惜福

唐の玄宗皇帝の太子に肅宗と申せしあり。ある時、玄宗御膳をすゝめ給ふ時、肅宗ち、の御まへにはんべり給へり。しかるに、羊のにくのありけるを、玄宗食したまはんとおぼしめし、すなはち太子に仰せられ、この羊のにくをきらせ給へり。肅宗、ち、の仰せにまかせて、すなはち刀をもちいてこれをきり給ふ。しかるに、羊のあぶらにて、かたなのやいばをけがせしかば、おりふしあたりに餅のありしを御らんじて、すなはち此もちをもつて、やいばをぬぐひ給ふ。玄宗、此よしを御覧じて、もちはこれ食物なり。おしひ「(二十六丁表)かな。此もちをもつてやいばをぬぐふはいはれなしと、おぼしめされけるあひだ、つくぐ肅宗を御らんじて、よろこび給はぬきしよくあり。しかるに肅宗、此もちをすてたまはずして、くちのうちへおしいれて、すなはちしよくし給ひしか

ば、玄宗この由御覧して、おほきによるこひましくて、太子にむかつて仰せけるには、およそにんけんのざいほうは其ぶんくにしたかつて、かぎりあると見えたり。天子よりばんみんにいたるまで、ざいほうに大小あり。たとひ数万のたからをつむといふ共、せんなき事にもちいなば、それすみやかにつきぬべし。たとひすこしきもの「(二十六丁裏)なりとも、たゞいたつらにすてざれば、たからの家のみつる事、をのづから長久なり。たとへば井の中の水のごとし。ぜんくをもつてくむなれば、そのみづつくる事なし。にはかにひまなくくむなれば、ほどなくその水つきぬべし。このゆへに、いにしへの聖人は天子のくらゐにましますといへども、身にはふるぎ衣裳をき、くちには美食をこのますして、榮花におごりたまはず、つねに天下のたみをやしなひ、ばんみんをあはれみ給ふ。かるがゆへに、その身もじゆみやう長久にして、国にわざわひなかりけり。しかるに、齊の宝卷、又は隨の煬帝は、たみのたからをうばい取、我が「(二十七丁表)身ひとりのたからとして、いつたんゑいぐわをきはむといへども、つゐにわざはひ身にいたり、国をほろぼしましませり。まことにてんかの君たる人は、たゞつゝしむにしくはなし。いま此唐の玄宗の太子をいましめ給ふ事、ごまつだいにいたるまで、天下の君たるへき人は、かゞみとすべきところなり。」(二十七丁裏)

挿絵 「(二十八丁表)

挿絵 「(二十八丁裏)

焼梨 聯句

唐の肅宗皇帝とて、御門一人おはしける。然るに、処士李泌と申ものありしが、仙人のみちをまなびて、嵩山といふ所にいんきよして、世をのかれてぞいたりけり。肅宗いまだ御くらゐにつきたまはぬとき、李泌、嵩山をいで、肅宗にまみへたてまつり、つねに御前にはんべりしが、又ある時、李泌、いづ

くともなく身をかくして見えざりし。然るに、肅宗くらゐにそなはりましませし時、かの李泌が事をおほしめしめしださせ給ひて、すなはち人をしてはうづをたづねたまひしかば、衡山といふ所にいんぎよしてぞいたりしを、「(二十九丁表)よびいださせたまひて、ひんかくのくらゐをもつて、れいをつくしまし〜て、よろつ天下の事におゐては李泌にとはせ給ひけり、ある夜、さむきおりふしに、肅宗、いろりのほとりに座したまひて、かたじけなくもみづから二つのなしをやき、李泌にこれをくだされけり。こゝに肅宗の御おとうとに、穎王と申て、いまだようせうにておはしけるが、肅宗つねにちやうあひし給ふ。故に、このとき肅宗の御そばに御座ありしが、かのなしを御覽して、しきりにのそませ給ひしかば、肅宗此よしきこしめし、すなはちの給ひけるやうは、なんしはつねに美食をして、何にとぼしき事は「(二十九丁裏)なし。しかるに、此李泌は、五穀をたちてくらはず、常にこのみをしよくす。かるがゆへに、我此なしをもつて、李泌にあとふ。しかるをなんじ、このなしをいかにかあらそひけるやとおほせしかば、穎王、すなはちとゞまり給ふ。又、肅宗の御おとうと三人までおはしけるが、此とき同座にまし〜て、たかひにおもひ〜の詩をつくり、李泌におくらせ給ひけり。まづ穎王の詩にいわく、先生年幾許顔色似童兒」。この詩のこゝろは、李泌は久しきものなれば、さだめて年もよるべきが、などさやうにはあらず、常にかんばせわかふして、たゞ童子などのことくなり。又、信王の詩にいわく、「(三十丁表)夜枕二九仙骨一朝披一品衣」。この詩のこゝろは、李泌は夜はせんにんのほねを枕として、ひるはいちやうのみとなる衣裳きる。それいんぎよをなすといへ共、我が身のたつときをうしなはず。又、一王の詩にいわく、不食二千鐘粟一惟喰二両筒梨」。此詩のこゝろは、李泌を二度天下の宰相になし給はんとありし時、かたくじたひを申つゝ、千鐘のしよりやうをうけざりしが、いま此二つのなしをたまはるを、すなはちうけて食する事、これその心ざしのたかきゆへ

なり。かやうに一々詩をつくらせ給ひて、李泌にをくり給ふとかや。又、肅宗つねにおほしめすには、李泌はこれ天道のへんげに「(三十丁裏)して、みづからをたすけつゝ、天下を太平におさめさせんがためなるべし。まことにこれ、李泌はぼんにんのたぐいによもあらじと、おほしめされけるあひだ、うやまひ給ふはかぎりもなし。其後、肅宗皇帝、長安・洛陽の二つのみやこを、おもひのまゝにおさめ給ひ、又、安史がらんのおこせしをも、すみやかにたいらげ給ふ事、これみな李泌がはかりことによりてなり。李泌、又、そのうち徳宗皇帝の時にいたりて、宰相の官にあかりて、いよくその名をあらはせり。故に、ときの人、李泌をたとへていふやうは、漢の高祖の臣下に、張良と申とも、よもかはこれにまさるへしと、ほめぬ人「(三十一丁表)はなかりけり。」(三十一丁裏)

挿絵 「(三十二丁表)

挿絵 「(三十二丁裏)

不受二貢献一

唐の憲宗皇帝とて、御かど一人まします、はじめてくらゐにつき給ふ時、昇平公主と申て、憲宗の御兄弟にておはしけるが、ある時昇平公主、みめよき女房を十五人ゑらませたまひて、憲宗へすゝめ給ひしかば、憲宗このよしを御らして、仰せけるには、我かち、順宗皇帝のましますとき、よろつ人のすゝむるものをうけたまはず。われいまちゝのをしへにそむいて、いかでか此ゝめをうくへきとて、則かの十五人の女房を、公主へかへし給ひけり。又、ある時、荊南と申ところより、ばんぜいへたる緑毛の龜を二疋まで「(三十三丁表)こそたてまつる。憲宗、これをもうけたまはず、すみやかにかへさせ給ひて、すなはちの給ひけるには、われ、つねにおもひけるには、いかんともして天下を太平におさめ、又は、賢人をたつねいだして、国のたからとなし、天下の事

をはからはせて、国をあんのおさまめ、ばんみんをのづから利をえて、たかにたのしみさかへんこそ、これ我が常のねがひなれ。あるひはちくるい・ているい、又は、草木にいたるまで、そのなりかたち、つねならず。世にめつらしきものなりとて、我にすゝむる事なかれ。まことにこれは、一たん人のまなこをよるこぼしむといへ共、きはめて」(三十三丁裏) なんのゑきもなし。これ、たからとするにたらず。故に、むかし孔子の春秋の書をつくらせ給ふといへども、それ世の中のずいそうなどはしるし給はず。これと申も、ずいそうは、させるゑきなきにや。こゝをもつて見る時は、いまよりして以後のもの、かならず世の中のずいそうをよるこびとして、ふたゝびそうもん申事なかれと、仰せけるこそことほりなれ。あるひは女色、あるひは世の中のずいそう、又は天下にめつらしきてうるい・ちくるい・草木、この三つのものには、人のころのおぼれやすきものなり。それでんかの君たる人、此うち一つもこのませ給はゞ、俛人おほく」(三十四丁表) 世におごり、君の心をまよはかし、よくしんのみちにひかされて、たとへば水をつゝみの一たひやぶれて、ふたゝびふさぎかたきのごとし。しかる時は、天下のまつりごとすたれて、つゐにわが身をほろぼして、国をうしなひ給ふへし。いま憲宗皇帝、はじめてくらゐにそなはり給ふと申せとも、よくそのみちをあきらかにして、女色をも、ずいそうをも、ふかくきはせ給ふ事、いにしへにもためしなく、まつだいにならびなしと申つたへし事とかや。」(三十四丁裏)

挿絵 「(二十五丁表)

挿絵 「(二十五丁裏)

遣使賑恤

唐の憲宗皇帝、くらゐにそなはり給ひてより、すぎし四年の事なるに、南方の国々に江・淮・兩浙・荆・湖・襄・鄂とて、この七ヶ所おほきにひでりして、

皆々木くさもかれぬれば、五穀のみのる事もなし。かるがゆへに、たみ百性、うへにのそまぬものはなし。憲宗、このよしきこしめし、ひとへにあはれみ給ひて、鄭敬と申臣下を、すなはち南方の国々へつかはし、うへにのぞむたみ共を、すくいあげんとおほしめして、かの鄭敬を御まへにめされて、なんじはいそぎこれよりも、南方の国々へまいりて、うへにのぞみしたみともに、」(三十六丁表) ひよろうをあたへて、たみのかまどをにぎわかし、うへをすくへとおほせける。鄭敬ちよくめいをうけたまはりて、すなはち御まへをしりぞきければ、憲宗、鄭敬をいましめて仰せけるには、われ、つねに宮中におゐて、一疋のきぬをたち、ことのやうをたすといへとも、みなそのかずを一々にしるしとゞめておく事も、これみだりにつるゑをなさんがためなり。しかりとはいへ共、今なんじ、南方へゆきて、たみのうへをすくはんととき、ひよろうのつゐゆる事をはからざれ。おほしといふとも、おしむ事なかれ。それ、たみのいのち、まつたければ、天下も又おもし。しかるときは」(三十六丁裏) 天下のきみとして、なんぞたみをめぐまさゞらんや。なんじ南方へゆきて、たみのうへをすくはんと時、いま我がいひしことのごとくせよ。しかれども、其国そのところにより、よき所をば、すくひをかるくすべし。又、あしからんところをば、すくひをおもくすべし。一人といふ共、もらす事なかれ。かならずばんみに、ふかくめぐみをつくすへし。これよりさきに幡子陽陽といふものを南方へつかはして、たみのうへをすくへと仰せつけしかば、うけたまはるとて南方へくだりて、たみの事をばさておきぬ。たゞあけてもくれてもさけをのみ、ゆさんはかりをこのみつゝ、民」(三十七丁表) をすくう事をば、たんにまかせて、ことにみづからが、かやうにあはれむといふ事は、ことばにもいだしざりし。なんじ今、南方へゆきて、かの幡子陽陽がありさまを、かならずなるふ事なかれ。けだし、国はたみによりてまつたし。たみはしよくによりてたのしむ。いま、たみのうゆる事をにぎはし、すくはさるときは、死するもの、おほかるべし。し

かも、たみ、方々へちりぬべし、もしかくあらましかば、いかんとしてか国を  
まつたくおさむへきと、つぶさに鄭敬をいましめ給ふは、ことほりとこそきこ  
えけり。つら／＼おもんみれば、憲宗皇帝は、我が身の用をば「(三十七丁裏)  
うすふして、たみをめぐませ給ふ事は、もつとも是あつし。まことにさいほう  
をもちいるのみちをしろしめされて、国をたもつのをえたまへりと、かんぜ  
ぬものはなかりけり。」(三十八丁表)

白紙 「(三十八丁裏)

挿絵 「(三十九丁表)

挿絵 「(三十九丁裏)

延英 忘 倦

唐の憲宗皇帝、あけくれ御こゝろにおぼしめすには、天下を太平におさめ、  
しもばんみんにいたるまで、仁儀のみちをおこなひて、国土ゆたかにさかへん  
事、いかがはせんとおほしめし、李絳・裴度と申て、二人の宰相おほせしを、  
延英殿にめされつゝ、天下をおさめん事のみを、たがひにひようでうまし／＼  
て、日もくれがたになりぬれ共、つゝに宮中へかへらせたまはず。おりしもて  
んき、はなはだしうして、いとあつかりしかば、憲宗ひたみに御あせながれて、  
御衣をうるほすはかりなり。二人の宰相、このよしを見る「(四十丁表)よりも、  
心におもひけるには、げにや我が君は、御座をくつろげたまはねば、御つかれ  
にてや候はんと、二人ともに御まへをしりぞきしかば、憲宗これをとゞめ給ひ  
ておほせけるには、われ宮中にある時は、そばにちかづくものとは、宮女よ  
りほかにさらになし。なんぞ賢者にちかづいて、かたる事あらめや。故に、  
まい日なんじらをめしいだし、天下をおさむる事のみをかたるにつけて、をの  
づからよろこばしき事なれば、さらにつかるゝこゝろなし。かまひていたはり  
申など、仰せけるこそことほりなり。それでんかのきみたる人は、一日のうち

をもむなしくをくるべからず。」(四十丁裏) つね／＼賢者をちかづけて、国を  
おさむるはかりこと、ゆるかせにすべからず。されば、いにしへ堯舜の御代の  
ときは、君臣一座につらなりて、天下にみちをおこなはんと、あけくれひよう  
どうし給へり。さて又文王は、あさよりくれにいたるまで、天下をおさめん事  
のみおもひくらすせまし／＼て、食をわすらせ給ひけり。故に、まつだいま  
て聖人の君と申て、ばんみんあおぎたてまつる。今これ憲宗も、なかおとり  
給ふべし。御代ゆたかにおさまりて、おんできなかりけるとかや。」(四十一丁表)

白紙 「(四十二丁裏)

挿絵 「(四十二丁表)

挿絵 「(四十二丁裏)

淮 蔡 成 功

唐の憲宗皇帝のとき、淮西の守護人に、呉元済と申ものあり。然るに、この  
元済、すでにむほんをおこし、天下をくつがへさんとせしかば、憲宗此よしき  
こしめし、すなはち数万人のぐんびやうをかゝる淮西へつかはされ、元済がらん  
をふせぎ給へり。此とき、憲宗の臣下に、李逢吉といふもの、宰相のくわんに  
ていたりしが、つね／＼元済とそのなかしうして、たがひにいんしんの通  
路あり。故に、逢吉、きみにそうもん申けるには、元済がぐんせいおほふして、  
たやすくだいぢしがたからんとぞんずるなり。むなしくみかたの「(四十三丁表)  
つわものを、うたせたまはんより、まつ此たびは、ぐんびやうどもをひきしり  
ぞけて、じせつを御まち候て、てきの手たてを御覧あれかしと申ける。こゝに  
御史中丞の官に、裴度と申ものあり。つら／＼おもひけるには、ぜひに淮西の  
てきをしたがへ、元済をうちとるべき事、なんのしさいかあるへきと、あんの  
うちにそんずれば、すなはち君へ申けるには、淮西のてき、たとへまふせいに  
つのと申とも、させる事はあるまじき。一戦にのぞみなば、たやすくてきを

ほろぼさん事、なんのしさいもあるましきと、君をすゝめたてまつる。憲宗、このよしきこしめし、すなはち仰せ」(四十三丁裏) けるには、我た々(はいと) 裴度一人をもつてなりとも、淮西(わいせい)のてきをばした(が)ふへきとて、いよ／＼(ぐんび)やうをすゝめて、逢吉(ほうきつ)がいけんにつきたまはず。つるに裴度を宰相(さいしやう)のくわんにあげさせ給ひて、てきをほろぼすへきはかりこと、ちうやおこたらず。しかりとは

のこうをなすへき。故(か)に韓愈(かんゆ)といふもの、淮西をたいらぐるのぶんをかいて、裴度(はいと)がてがらをあらはし、憲宗(けんそう)へこれをたてまつりしも、ことほりとこそきこえけり。

帝鑑図説卷第六終 「(四十五丁裏)

挿絵 「(四十六丁表)

挿絵 「(四十六丁裏)

申せども、はや一年をすぎゆけ共、たがひに勝負(しょうぶ)つかざりしかば、裴度、おもひけるには、我かくてみやこにゐて、いろ／＼のはかりことをなすといへ共、つるにたのりをえず。しよせんかくてはかなふまし。みづからぢきに淮西へはせむかひ、かの元済(げんせい)と一せんにおよんで、たがひに勝負(しょうぶ)をけつせんとて、此よしかくとそう」(四十四丁表) もん申ければ、憲宗(けんそう)、きこしめし、おほきによろこびまし／＼て、すなはち裴度(はいと)を淮西(わいせい)へつかはされける。このとき裴度、君の御前(まへ)へまいりて、御いとまごひを申時、ぢきに申けるやうは、われ、今君のめいをうけたまはりて、淮西におもむき、かのてきをおもひのまゝにたいぢせば、すなはちみやこにのぼり、君にたいめん申べし。もしかのてきをしたがへずは、わが命(めい)を義(ぎ)によせ、かばねを軍門(ぐんもん)にさらし、二たびみやこへかへるましと申あげしかば、憲宗(けんそう)、此よしきこしめし、裴度(はいと)が心(こころ)をかんじたまひて、おぼえずなんだをながし給ひて、かたじけなくも通天(つうてん)の御帶(ぎょたい)をといて、」(四十四丁裏) 裴度(はいと)にこれをくだされけり。さて、それよりも裴度(はいと)は、すでに淮西(わいせい)にいたりて、数万騎(すまんき)をもよほして、数度(すど)のたゝかひにをよぶといへ共、一度(いど)もおくれをとらず。こゝに裴度(はいと)がつはものに、李愬(りそく)といふかうのものあり。あるとき裴度(はいと)、げちをなして、この李愬(りそく)を大将(たいしやう)として、元済(げんせい)がぢんへ夜うちをなす。元済(げんせい)がつわもの、おもひもよらぬ事なれば、こと／＼くはいぐんして、つるに元済(げんせい)を思ひのまゝにいけどりて、淮西(わいせい)のてきをしたがへ、裴度(はいと)がこうをあらはせり。逢吉(ほうきつ)がいけんにしたがひたまはざりしは、憲宗(けんそう)の心(こころ)あきらかなるゆへとかや。裴度(はいと)がちうせつなかりしかば、いかでか」(四十五丁表) 淮西(わいせい)をたいらげて、そ

※1 「づ」：貼り紙で「づ」と修正。

※2 「へい」：貼り紙にて修正。

※3 「棠花」：貼り紙にて修正。

